UC バークリー校の大学院教育

G. R. F. フェラーリ
カリフォルニア大学　バークリー校
コメント：J. G. マニング
スタンフォード大学
（文学研究科AAC委員）

フェラーリ：私がケンブリッジ大学で院生であった1970年代当時，イギリスでの博士課程は 3 年間の規定年限で，コースワークも課されず，まさに自由気ままでした。修士課程というものもなかったから，学部卒業後，そのまま博士課程に身を置いたわけです。講義はどれをきいてもよかったし，ききたくなければ，何もきかなくてもよかったのです。しかし，古代哲学を専攻する者には週に一度，少人数のグループで，古代哲学のオーウェン G. E. L. Owen 教授のもとに集まる，ということがありました。毎回，別のテクストを読み，これをめぐって討論するのです。しかし，それさえ義務ではなくオプショナルでした。成績や単位認定といったことも，とくにはありませんでした。

その 3 年間の間にしなければならなかったのは，博士論文を一から書き上げることだけでした。他大学の教授の前で口述弁論をする，つまりこれがイギリスでの現行のシステムなのですが，その必要さえありませんでした。自由で気楽そのもの，ほんとうに好きなことができたわけですが，それは良いことでもあり，悪いことでもありました。

つまり，知的冒険が十分にできたという良い面もあったのですが，しかし一方で，勉強するか否かはまったく自分自身にかかっていました。結局，動機付けに失敗したということでしょう，私は 3 年間の間に博士論文を仕上げることができなかったのです。ただ，イェール大学の哲学科にポストを得る好運に恵まれ，そこで，最初の 2 年間のフルタイムの職務の傍ら，博士論文を仕上げました。こんなふうに研究のスタートを切ることを，私はけっして人に勧めません。みなさんの学生がこんなふうであってほしくないと思います。もう一つ，言っておくべきことですが，当時のケンブリッジでの自由なシステムは，まさに私のように，完全に専門化された学部教育を受けた者に対してこそ適するものであったということです。つまり，自分の専門しか勉強しないということですが，私も学部時代の 3 年間――そう，4 年間ではありません――ひたすら古典学だけ勉強したのです。

一方アメリカでは，システムが異なります。アメリカでも，学生は確かに主専攻を選びます。しかし，また，異なる分野のたくさんの科目をも，学部 4 年間の間に学ばなければなりません。

たとえば，バークリーで古典学を専攻しているとしましょう。そうすると，こちらでもそうと伺いましたように，好きな科目を何でも選んでよい，というのではなくて，あらかじめ設定されたいくつかの領域の中から選んで，専門外の科目を勉強しなければならないのです。古典学の学生なら，たとえば生物学，物理学，国際関係の三つの領域の中から，それぞれ何か科目を選ばなければならないといった具合です。これを breadth requirement と言って，このような領域が他にもいくつか設定されています。

こうしたアメリカのシステムのもとで学部を終えた学生は，博士論文を書く準備のまだ整わない状態で，専攻科目もまだきちんと修めないで大学院に進むことになります。そこで，さらに専門分野の教育を受け，試験も受けて，それからやっと博士論文執筆に入るということになります。日本でもそのようですね。

私は，イギリスとアメリカの両方のシステムを――一方は学生として，他方は教員として――実際に経験したわけですが，実は，アメリカのシステムのほうを

好みます。自分の専門の例で言いますと，ギリシア語とラテン語を若い頃から――これは当時のイギリスでは，むしろ普通だったのですが――習いました。これについては，もちろん言えることはいろいろあります。しかし，学部生になってからこうした言語を習い始めるアメリカの学生だって，素晴らしく上達することに気がつくようになりました。

早くから習い始めた私程度には，彼らも習熟するわけですから，早期教育のおかげで特別の成果を得られるというものでもないのでしょう。他方，私のように早くから専門分野の勉強に集中するために，他の多くの科目を放棄しなければならないということについては，言うべきことは多くあります。私は数学をはじめ，科学も現代史も，16歳で学ぶことをやめてしまったのです。おかげで私など，お金の管理一つとっても，よくわからなくて苦労していますけれど，もっと重要で深刻な問題はと言えば，早くからの専門化が，教養の偏りがちな学生を育ててしまうということです。若い時代の不勉強は，あとで取り返すのが困難ですからね。以上，大学教育全般について，思うところを少し，まず述べさせていただきました。

それでは，大学院課程と大学院生活について，アメリカで経験してきましたところを，やや詳しくお話したいと思います。昨年の，名古屋でのマニング先生のご講演の原稿を読ませていただいたのですが，――おききになられた方もたくさんいらっしゃると思います――先生はその中で，短くて楽な博士課程プログラムと，長くて厳しいものと，この二種類があるとおっしゃっています。スタンフォードは前者，そして光栄ながらバークリーは，たいへんな後者のプログラムを持ちます。

もっとも，学位取得に至る大学院課程の縮小化の圧力が，近年，アメリカ全体で高まってきていて，――実際に調べたわけではないのですが――バークリーでも，またおそらく，他のところでも，状況は変わりつつあります。こうした方向への変化を促すように，実際，基金からの助成金も出ています。甘くて楽なプログラムと，長くて厳しいものとの対照は，以前ほどには目立たなくなってはいます。

スタンフォードの古典学科では，博士号取得まで5年という規定がありますが，多くの場合，もう1年かけて，6年で完了します。バークリーでは，6年の規定のところを，余分に1年とって7年かける学生が多い。ただ，7年以上をかけることは，大学側も勧めませんし，バークリーでも今や珍しい。外国語習得に余分な時間のかかる古典学科でさえ，実際，こんな状況です。哲学のような分野であれば，外国語習得に時間をかける必要がないので，5年で課程を終了できます。

私のいる古典学科では，6年間の大学院課程のうち最初の4年間では，授業をとり試験も受け，あとの2年間で博士論文を書きます。最初の4年間のうち，はじめの2年間をかけて，ギリシア語かラテン語かいずれかを専攻して修士号を目指します。

修士号は，独立した学位ではありません。つまり，バークリーで修士号だけとってやめる，ということはできないのです。――もっとも，修士号をとった段階でやめてもらうということならあるのですが。とにかく，この修士号は，ギリシア語かラテン語の授業課題や試験に基づいて，また，選んだ言語でさらに文学と歴史の試験を受けて，こうした基礎学力に対して与えられます。

資料(a)，(b)は，ギリシア語選択の場合のギリシア文学・歴史の試験の一例です。日本の大学では，むしろ，ギリシア語を読む方が多いようですからね。また資料(c)，(d)，(e)，(f)のギリシア語の試験は，PhDプログラム用の試験です。ギリシア文学・歴史のほうは修士課程用のものです。修士課程では論文は書きません。「ロンブン」（論文）執筆の占める比重は，アメリカでは日本と比べると低いと言えます。修士論文の代わりに，演習用のレポートを書きますし，3，4年目になると，古典学科の中で各科目，つまり哲学や文学，歴史，碑文学，考古学などを学びます。ギリシア語ならギリシア語の翻訳課題の試験が，さらに待ち受けています。

PhDプログラム用の語学試験は，修士課程用と比べると，難しい。ドイツ語と，フランス語またはイタリア語の現代語の試験もあります。古典学者や古典学の教授ならみな，ドイツ語などで書かれた論文も読まなければなりませんから。日本語も習わせることができたらよいのでしょうけれど，それはさすがに，ちょっと行きすぎになってしまうかもしれませんね。

さて，4年間の課程を終えると，いよいよ博士論文に取りかかりますが，その前に，もう一つだけ試験があります。口述試験で，学科の審査委員の前で，古典学者としての一般的能力を証明しなければなりません。

アメリカの多くの大学と同様に――アメリカではこの点，システムが統一されていませんので，すべての大学がとは言えませんが――バークリーでは，博士論

文認定のための口述試験はありません。博士論文を書くための能力を問う試験があるのみです。博士論文そのものが認定されるためには，論文指導に当たったバークリーの教員 3 名からなる審査委員会によって，論文が博士号授与の水準に達していることが認められればよいのです。審査委員のほうで「はい，できましたね，十分に力を尽くしました，もういいですよ」と告げれば，それで終了ということですね。

比較のために，バークリーでもう一つ，私のよく知る学科，そこの方たちと仕事をする機会も多い哲学科の場合について，お話ししてみましょう。プログラムはよく似てはいますが，ただ，もっとシンプルです。まず，外国語習得は哲学においては，少なくとも核心的な部分ではありません。ですので， 3 年間で科目履修や口述試験を終えて，上に進みます。ただし，現代語の外国語履修は必要です。

哲学科では，口述試験の占める比重が高く，これが学生にとっても厳しい挑戦となります。古典学科の口述試験よりも難しく，準備を要します。論文執筆能力の審査試験の参考資料(g)，(h)，(i)は，古典学科ではなくて，この哲学科のほうのものです。試験準備のために学生自身が問題を立てて書いた項目を載せていますので，どうぞご覧になってください。

論文執筆試験を受ける学生は，審査委員となる教員からリーディング･リストをもらった上で，最低 1 学期間，15週間をまるごと使って準備し，審査委員に自分の立てた問題を報告します。試験ではかなり厳しく突っ込まれ，一人前の哲学者として堂々と審査委員と渡り合うことができるかどうか，テストされます。

ところで，学生が着々と課程の要件をこなしていっているかどうか，私たちは常に見守っていかなければなりませんね。金山先生に伺ったところでは，日本では多くの学生にとって，博士課程の 3 年間で「ロンブン［論文］」を仕上げることはたいへんなことのようですね。私の場合もそうでしたが。私の場合，問題は自由すぎるということだったわけですが，日本ではやや違った事情があるのかなとも想像します。そのあたりをみなさんから伺いたく思います。お昼に金山先生の学生さんとお話できた限りでは，論文執筆が進まない理由について，なんとなく見当はつくような気もしますが。この点はまた後で伺いたいと思います。

バークリーでは，学科の教員がみなで手分けして，責任を持って個々の学生の面倒を見るようにしているのです。大学院に進学した学生には，大学院生全体のアドバイザーだけでなく，一人一人の学業の進行状況

について学期ごとに相談にのるスタッフも配属しています。さらには，大学院生全体のアドバイザーや，一人一人のためのアドバイザー以外の， 3 名の教員からなる委員会が，学年末ごとに学生と面談をします。何か問題がないか，学生の様子を見守る教員が，さらに加わるわけです。このようにして，教員側も，担当科目を履修する学生かどうかなど，一人一人のことが結構わかるようになります。ご参考までに言いますと，バークリーの古典学科の大学院生は，例年30名ぐらいです。

科目の履修を終えたら，今度は論文の執筆です。論文執筆の段階では，すでに科目等の履修は終了していることになりますが，中には，引き続いて個人的に演習に出席する者もいます。また，論文執筆と並行して，教える側になってもらう，ということも多くなります。この段階では，論文指導の教授が主に責任を持って学生の面倒を見ます。すなわち， 3 名の論文審査委員の長のことですが。この時期ですね，学業の進展状況に個人差が現れてくるのは。

学生を追い立てるか，それとも予定通りの進行を好むか，あるいはそういった面では口をはさまないか，教授によって考え方は違います。早い段階で急かしてしまうと逆効果であるという人もいれば，気ままにさせず，手綱を締めるとよいタイプの人たちもいます。

大学院生たちの滞りない学業進展のために，学科として私たちが一つ試みているのは，大学院生のためのアドバイザーが定期的にワークショップを行うことです。学生たちが仲間や教員の前で，論文の草稿を部分的に発表することができるようにしているのです。論

文執筆に励む学生すべてに，発表の機会を持つことを勧めています。これは公開発表の練習となり，ポストの応募先で将来行うことになる job talks の予行演習にもなります。

このようにして大学院生たちを，我々の研究の世界に慣れさせていきます。それは，彼らの論文執筆のインセンティブを保たせるためでもあり，それとまた同時に，プログラムの自負する高い水準に恥じない学生を育てるためでもあります。2 年間で論文を完成させることは，当然難しいことではありますが，幸いなことに，3 年間のうちには，たいていの者は書き上げています。

なぜ，たいてい 3 年間で書き上げるか，その理由はこうです。3 年間で書き上げなければ，それ以上の延長に対して，彼らには最低限の援助もできないからです。PhD を取得しなければ，大学にも短大にも就職できませんし，ポスドクの奨学金も得られません。こうした事情が，おそらく論文完成に拍車をかけることと思います。学生は自分たちがこんな状況にあることを知っているから，教員のほうではっぱをかける必要もありません。

この辺で，一つ重要な違い，マニング先生の大学とうちの大学との違いを，ご説明することにしましょう。先生のスタンフォード大学は私立，一方，バークリーは公立の，カリフォルニア州の大学です。アメリカには国立の大学はありませんが――日本とは違いますね――，公立と私立の大学があります。バークリーの場合，カリフォルニア州の年間予算から財政補助を受けているのです。

昨今では，大学の予算は大部分，個人の寄付やアメリカ政府の公的基金から出ています。ですから，国立大学は存在しないとは言え，財政的には，大学もアメリカ政府に大きく依存しています。ただし，国の公的基金は，バークリーの場合，自然科学の分野にねらいを定めていますので，人文科学の分野は主に州から，予算を得ています。

自然科学系の分野と比べると，文系ではぐっと予算は落ちるわけです。一般に，アメリカでは公立の大学は私立の研究機関よりもお金がない。ハーバード，イェール，スタンフォードといった私立大学は，アメリカでも最高の公立大学であるバークリー校や，ミシガン大学，テキサス大学などよりも豊かなのです。

公立と私立の違いは，大学院教育にとりわけ大きく反映されます。州立大学の学部生は，その大多数が州の住民です。バークリーの学部生の場合も，大部分がカリフォルニア州民です。ところが，バークリーの大学院生は，アメリカ全土から，また，外国からもやってきます。大学院生は学部生に比べると，そうした意味で，もっと選ばれて入ってきます。バークリーの大学院生は，彼らこそが他大学との比較においてバークリーの知的ステータスを支える点で，flagship student body と呼ばれています。

一方，私立大学は学部生をも，所在地の住民に限らないで広い範囲から選抜して入学させることができます。こうした大学では，学部生たちが大学の知的ステータスを支えるのです。イェール大学のようなところでは，学部生のほうが，いわば顔なのです。

こんなわけで，だいたい公立大学の大学院生は私立大学の大学院生よりも，学内で肩身も広いものです。また，公立大学の各学部（department）も，自分たちのステータスはおおむね大学院生の実力に左右されると考えています。もっとも，バークリーの場合，このような傾向は相対的にはむしろ弱いと言えるでしょう。

というのは，カリフォルニア州が，小国家数国分の大きさであること，まあ，小さな国家なみの州ですね。そんなカリフォルニア州の，まさに州の代表的大学として，カリフォルニア大学のバークリー校は――カリフォルニア大学にはロサンジェルス校，アーバイン校など，何校かありますからね―― もっとも重要な大学であり，カリフォルニア州中のたくさんの学生の中から，良い学生を選ぶことができるのです。ですから，我々のところの学部生は非常に優秀ですけれども，これは公立の大学の一般的事情とは異なるということですね。

ところで，大学院生にとって，公立と私立の違いが問題となってくる点があります。実は，公立校での大学院生は確かに立場上居心地はよいのですが，一般的には公立校の大学院生のほうが，私立校の大学院生よりも，経済的に優遇されていないのです。

私立大学での大学院生は，進学の時点から博士号取得までの全期間にわたって，授業料も支給される奨学金の全額給付が保証されます。確かに，そのうち一部は，ティーチング・アシスタント職に対する給料という形で供与されます。しかし，ティーチング・アシスタント職もせいぜい一年限りといったもので，これは，金銭的援助の一環としてというよりは，むしろ学生の知的訓練のために行なわれているとみてよいでしょう。

つまり，これらの大学は，完全な奨学金支給もおそらく可能なのに，あえて教育経験をさせるために，テ

ィーチング・アシスタント制を取り入れているのです。しかし，多くの公立大学では事情は異なります。学部生の人数が格段に多く，学部授業のクラスも多人数からなるため，バークリー校をはじめとする大規模な公立の研究機関では，大学院生のティーチング・アシスタントは，なくてはならない存在です。

バークリーでは，ティーチング・アシスタントなしではやっていけません。奨学金のための財源も乏しいため，公立大学での大学院生は，多ければ4， 5学期間教えることになります。1年が2学期からなり，各学期は15週間にわたります。スタンフォードなど，他の大学では， 3学期制，つまり4半期が3学期分あるということになります。

公立大学の大学院生は，場合によっては6，7年間の間に4，5学期間も教えるわけですが，学部（department）の財政状態によって多少事情は異なるでしょう。バークリーの古典学科は，アメリカの基準から言えば古くて由緒ある学科で，国内でも評判が高いものですから，民間からの寄付も多いのです。

ですから，大学院生に奨学金が出せるし， 6年， 7年の年月の間に， 3学期間程度のティーチング・アシスタントをしてもらうだけですみます。こうした仕事は，論文執筆の妨げとなる可能性がありますが，やはり，最低3学期間ほどは，こなしてもらいたいと考えています。大学の教授になったら，彼らも研究だけではなく，教えることもしなければならないのですから。上級の大学院生には，まったく1クラスをまかせてしまう場合もあります。単にティーチング・アシスタントとしてではなく， 1クラスを教えるように，つまり学生の評価も含めて1クラスをまかせるわけで，こちらとしては見守って，アドバイスを与える程度にとどめます。

さて，最後に，公立と私立との違いが留学生にもたらす問題について，お話ししましょう。公立の大学や研究機関というのは，まずは，その州の住民のために設立されています。ですから，他の土地から来た人たちと比べて，州民の授業料は低く設定されています。バークリーの大学院生であれば，年間8,000ドルほどです。

これが，カリフォルニア州以外の人たちですと，さらに15,000ドル払わなければなりません。これは学部（department）が払うものですから，学部が経済的に許容できる範囲でしか，年間に大学院生を受け入れることができないということになります。バークリーの古典学科の場合ですと，毎年， 4名から6名くらいの大学院生を受け入れています。

ところで，アメリカ国民であれば，よそから来た人でも大学院に1年間在籍した時点で，法的にカリフォルニア州の住民となることができるのです。我々のほうも，余分な15,000ドルを払うのは1年間だけですみます。

しかし，留学生の場合には，法的にカリフォルニア州の住民になるということができません。彼らは外国人居住者ということで，大学院の在籍期間ずっと，余分な15,000ドルを払い続けなければならないのです。つまりは，この膨大な費用を，我々が払うわけです。ですから，留学生の受け入れに関しては我々のほうでも，本当に彼らのために6年， 7年と学費を払う用意はあるのか，熟考を迫られることになります。

つまるところ，古典学科としては，大学院課程に例年， 1名しか外国からの学生を受け入れる余裕はないということです。受け入れることのない年もあります。その上，留学生の母語が英語ではない場合の問題も出てきます。つまり，言葉が共通で，何かと事情にも通じやすいイギリスやカナダ，オーストラリアからの学生と比べると，不利となってしまうということです。

幸い，思い出すところでこれまでにイタリア，ギリシア，ブルガリア，コロンビアといった国から留学生を受け入れてきました。私が着任して以来，日本からの留学生はいませんが，みなさんの学生さんで，もし関心を持っていらっしゃる人がいれば，何とかうまくいくように，アドバイスも差し上げたいと思います。

おそらく，実際の，より現実的な希望としては，せいぜい1年間といった，日本の大学に席を置いたままの短期留学でしょうか。交換留学といった形などで，また，在籍中の大学からの奨学金が必要となってくるでしょうが，バークリーのような知的環境に身を置くことで，おそらく，得るものも少なくないのではないでしょうか。

おしまいに，いかにして大学院生を集めるかという問題です。これに関しては一つ，バランスを失うことのないよう心がけるべきことがあるように思います。それは，どの大学院でも，博士号を取得した者の就職先を見つけてやれる以上には学生を受け入れてはいけないということです。大学院生の受け入れ人数を高く保つことだけを気にしている場合に，これは特に注意すべきことでしょう。

学生のほうもそれをすぐに感知して，そうした大学院への進学を避けるようになります。けれども他方で

やはり，学生の質だけではなくて，人数も大切なのですね。よいことか悪いことか，大学側が各学部の現状評価をして予算の割り当てをするための基準になるからです。

アメリカの場合，幸いなことには，人文学の分野の大学院生にとって，就職の見通しは大体においてまずまず明るいと言えます。アメリカでは，学部学生のみの大学がたくさんあって，とりわけ私立大学など，財政的にも余裕のあるところが多く，レベルも高い。アメリカでは，このような4年制大学が，規模の大きい研究機関――学生の野心はこういうところに向かうと思われますが――と相並んで，たくさんそろっているわけです。

こうした4年制大学の教授になるのも，何もがっかりするようなことではありません。多くの優秀な古代哲学の研究者が，こうした大学に勤めています。自分のところでは大学院生を正式には持っていないわけですが，いろいろな機会に大学院生と交流することはできるのです。

とりわけ，大規模な研究機関が大学院生を集めたい場合，人文系の学部としてできることの一つは，人文系の活躍が勢いも意義も失っていないことを，大学当局――我々のボスですね，ボスのことも「キョウシ」（教師）と言いますか？――に知らしめることでしょうね。科学関連の共同プロジェクトがこれだけ盛んな現在のアメリカにおいては，とくに言えることですね。

エクソン・モービルやマイクロソフトが研究機関の門をたたき，それがニュースになって新聞の見出しを飾り，資金がなだれこむ，こういう時勢に人文系の教授も研究室に閉じこもっているわけにはいきません。New republic literary journalism など――これらは学術誌や研究書よりは人々の目にふれるものですが――だけでなくて，もっと一般向けのものを書いたり，それから，公共向けの学内のプロジェクト以外にも学外の共同体でも活躍すること，それから，他分野との共同研究，外国との共同プロジェクトなどにも力を入れ，すすんで参加することですね。

私自身，これまでの年月，どちらかと言えば，研究に静かに専念してきました。今回の来日で，ここでご提案したことを，何とか自分でも実行できたことになります。これからも，どういった機会があるか，わかりませんけれども。申し上げたいのは，教授たちが人文系の学際的研究や活動に力を注いでいくなら，それだけまた，お金のためではなく高い学問的な志を持って大学院にやってくる優秀な人材を，期待できるだろうということです。

これをもって私の話を終わりにします。

司会：それでは，スタンフォード大学の古典学科で現在大学院コースの主任を務め，本研究科の AAC 委員もお引き受けいただいているマニング（Joseph G. Manning）先生にコメントをお願いしたいと存じます。

マニング：このワークショップに出席させていただいて，実に光栄です。これまでの訪問でお目にかかった方々と再びお会いでき，また同僚とお話しできるのは，うれしいことです。フェラーリ先生は，アメリカではご近所なのですが，ここ名古屋ではじめてご一緒しました。先生のご報告，興味深く拝聴し，とりわけ先生の最後のご意見，もっともと思います。お話の中で，いくつか考えたことを述べてみます。

アメリカの大学は今，大変なプレッシャーのもとにあります。さまざまな事情と，それにともなう困難があり，私も心配しています。スタンフォードはアメリカでも最も典型的な，自治化の進んだ大学ですが，大学全体の運営，またこれに対する教授陣の関わりも含めて，今や多くの大学が自治化をますます進めている状況です。

けれども，大学院生を集め，教育するという点では，根本にもどり，組織として上から下へ，また，下から上へ，いったい我々は何をどうしようとしているのか，よく反省してみなければならないと思います。そこで，バークリーとスタンフォードとを見てみますと，バークリーは，アメリカのみならず世界でも屈指の古典学の大学院プログラムを持っていますから，スタンフォードの教授陣としても，長年にわたってバークリーとの間で交流の制度を維持しているのは，実に喜ばしいことです。

スタンフォードとバークリーは，学生も教員もいろいろな交流の場を持っています。よきライバルでもあります。ある意味では，確かに公立・私立の違いがあるのでしょうが，大事な点では，つねに相互に協力しあっています。図書館はバークリーのほうが蔵書をそろえていますから，私などはよくバークリーで勉強します。なお，私はアメリカ人で，教育もアメリカで受けています。私は，中世の建築史で学士号をとり，シカゴ大で PhD を取得しました。そこでの大学院課程のプログラムは，今でも――どの分野でも，なかなか，急激には変化はありませんからね――，長くて厳

しい部類の典型です。それで，私は中世の建築史からエジプト学に転じ，さらに今は，職業として古代史とパピルス学に携っています。アメリカの大学院プログラムがいかに柔軟なものであるか，よくおわかりになるのではないでしょうか。少々，きついですけれど，きついのを好む人もいることでしょう。

けれど，この柔軟性という点から考えてみますと，学生のバックグラウンドなどを考慮して，どのように大学院課程のプログラムに，受け入れるか，また，どれだけ訓練するか，どこまでを本人にまかせるか，といった問題が出てきます。言うまでもなく，もっとも優秀な学生は，独学するものです。問題は，例えば，科目履修などは何年させ，どれだけは自分でやらせるかといったことですね。スタンフォードでは 5 年のプログラムが長引く傾向があり，バークリーでは短縮してきているのではないでしょうか。

スタンフォードでは，今や 6 年かけるのが普通になってきていて，考古学やパピルス学など，専門的な訓練を要する分野では，さらに長引く傾向さえあります。スタンフォードでは 2 年間の科目履修と試験のあと，大学院生はもう 1 年，ゼミなどに出席するのです。また，古代史，ギリシア文学，ラテン文学，考古学などを専攻する学生は，ギリシア語やラテン語の語学試験も受けなければなりません。とにかく，最初の 2 年間で履修科目をとるというシステムで，バークリーとは少し違うわけですね。

フェラーリ先生がおっしゃっていますように，スタンフォードでは，学生は 5 年間，皆同じように奨学金をもらいますし， 6 年目も普通はもらえます。ところが，シカゴ大での自分の経験を申し上げますと――バークリーでも同じかもしれませんが――誰がどういう奨学金をもらうかといった競争が，学年が上がるごとに激しくなっていったものです。

正直に申し上げるなら，私はむしろ，当時のシカゴ大のシステムを好むのです。というのも，スタンフォードでは，学生は 5 年間，あるいは 6 年間，誰もが同じ奨学金をもらえるので，それゆえに少々怠けがちになるということがあるわけです。奨学金のために競争しなくてもすみますから。学生のほうは気持ちの上で楽をしてしまい，私たちのほうで，はやく出て仕事に就くよう促さなければならないといった具合です。学生を職に就かせることは，各大学院のステータスに関わってくる重要なことですからね。この点について，少しお話ができるとよいですね。

それから，先に申しましたように，専攻分野の限定

の問題，そして，学生をどこまで教育するかという問題ですね。80年代半ばにシカゴ大で大学院生だった頃，ベーカーBaker 委員会というのが有名で，確か1986年でしたか，人文系も含めて，一括して 5 年間の大学院プログラムを打ち出したのです。

その頃，私が所属していたのは中近東言語文化学科ですが，通常 PhD まで12年間かかるところを， 5 年というのはどんなにしても無理，とみんなで言っていたものです。私は10年かかりましたが，今でもやはり，エジプト学などでは平均12年くらいかかるのではないでしょうか。エジプト関係の複数の古代語だけでなく，他領域から一つ，私はギリシア語をとりましたが，また，そればかりではありません。PhD が何を意味するかということ，これは，現在の多くの人たちの持つ PhD に対する考え方――研究を始めるための資格，ですね――とは違っていましたし，やはり今も違うように思います。

シカゴ大では，当時は PhD を終えると――今でもそうですが――，既にその分野ではエキスパートでした。ですから，たとえ12年かかったとしてもそれでよいのです。その分野では確立した研究者として着実に歩を進めていて，研究者としても，もう中堅になりつつあるという状態ですからね。ですから，PhD の意味の違い――エキスパートであることの証明か，キャリアの始まりを意味するのか――は，大学院課程の甘くて短いプログラムと，長くて厳しいプログラム双方にとって，重要なポイントですね。甘くて短い方が標準的になりつつあるようですが，問題は中身，質ということです。果たして 5 年なり 6 年間で，どの分野でも一概に PhD 取得に至ることができるのでしょうか。できるのかもしれませんが，でも，質の方を私は心配します。

最後に一つ申しておきますと，近年の特徴としてスタンフォードでは，既に修士号をとっている学生を大

学院に受け入れるようになってきています。私は12年スタンフォードにいますが，確かに，PhD 取得を目指す優秀な学部卒業生が多々やって来ますし，大学院に合格はできるかもしれませんが，果たして博士課程プログラムのための準備はほんとうに十分か，心配な場合もあります。スタンフォードの大学院に入る前に，各大学で修士号をとっておくことが，今や必要条件のようになってきているのです。

また一方で，ちょうど私が大学院時代に中世建築史からエジプト学に転向しましたように，ギリシア語からラテン語への転向，あるいはその逆のケースなどで，スタンフォードの古典学科に PhD を取りにやってくる優秀な学生がいます。そんな場合にはいつも，1 年間の post-Baccalaureate の資格を取ってきなさいと言います。これは，UCLA やペンシルヴェニア大学などがいいのですが，スタンフォードではやってないのです。こんな場合，バークリーではどうでしょうか。つまり，優秀な学生が，こうした余分な課程をとる余裕がないばかりに，博士課程に入るための要件を充たさないことになってしまうのですね。スタンフォードなどのように，2 年間すぎたら 3 年目で教えて論文も執筆して，という具合になるのが理想なのですから，本当に，博士課程の短いプログラムというのは余裕のないものなのですよ。

それからおしまいに，就職のことですね，雇用状況はどうか，需要を越えて学生を育てるわけにはいきません。しかし，自分で新しい分野を生み出そうとする者，意欲的で既成の学問的区分にあきたらない者，高校レベルの教育職を希望する者などいますから。実際，スタンフォードでも毎年一人や二人は，高校レベルの良い学校でギリシア語やラテン語を教えたいという学生がいます。それを認めるべきか，スタンフォードでも問題になりました。教養系の大学や研究機関ではなくて高校への就職者が出てくることで，学科の威信は傷つかないかということです。ただ，他の大学ではどうでしょうか，近年，はじめから高校教師を目指す学生が出てきたのは，興味深いことです。それでは，このあたりで終えたいと思います。どうもありがとうございました。

Q：今の post-bacc について，もう少しご説明いただけますか？

マニング：この post-bacc と言いますのは，古典学の分野で優れた PhD プログラムに入る準備として，主にギリシア語やラテン語の学力が足りない学生を，一年間かけて訓練するコースです。たいてい，どちらかの古典語を学ぶのですが，UCLA やペンシルヴェニア大学でやっているコースが有名です。それ以外の大学でもやっているかもしれません。1 年間のコースで，何か認定してもらえるのですが，正式な名前は何でしょう，certificate in Classics か何かだったかと思います。大学院に入れるように，専門教育で穴のあるところを補うのですね。

Q：それで，UCLA のプログラムがその一つなのですね？

マニング：ええ，私の知っているのは，UCLA とペンシルヴェニア大学です。もっとも知られているのがその二校のプログラムですね。古典学で，この一年間のプログラムで資格を出している大学は，他にもあるかもしれません。

フェラーリ：基本的に，古典語の補習のようなものですね。

Q：今朝のワークショップでフェラーリ先生は，古代哲学専攻のポスドクは比較的職を得やすいと，お話しなさってらっしゃいましたが，バークリーの古典学科でも，マニング先生が言われましたように，高校教師を目指す学生はいますか？

フェラーリ：いいえ，我々のところでは，そういうことはありません。いや，まったくのところ，よい高校教師というのは大切です。ドイツのような国の偉大なところは，ギムナジウムの語学教師が大学教授のようなステータスを持ち，大変尊敬されていることで，アメリカでも，高校レベルで教師が優れているなら，これは国全体にとってよいことでしょうね。

ただ，なぜ我々が高校教師を出さないかというと，バークリーの古典学科のプログラムの場合，常に全米のトップ 3 に入っているからです。ということは，バークリーにやってくる大学院生は，大学のポストに就くことを希望してやってくるというわけで，我々のほうでも，希望をかなえる責任があるわけです。最初から高校教師を目指してやってくる学生は，私の知る限り，いません。以前には，修士号だけほしいという学生を入れることがあり，そのような学生の中には高校教師を目指す者もいました。けれども，今ではそういうことはしないのです。以前には，我々が奨学金を出せない学生がいて，彼らは教師をしたりして自分のお金でやっていかなければならなかったのですが，それを我々は変えました。

現在では，我々がお金を出せるような学生しかとりません。アメリカの代表的な古典学科としての，わが

学科の立場上，大学職にしっかりと目標を定めた学生を入れています。でも，高校教師という大事な職を選ぶ学生も教育するというのは，大学院のプログラムとして，よいものですね。

Q：日本では，とにかく職を得るのはたいへんです。（大学院に）入れる学生に責任を持つとおっしゃいましたが，いわば産児制限をするということでしょうか。

フェラーリ：アメリカには大学や短大などが多いので，必ずしも高校教師という選択をしなくてもよいのです。スタンフォードについて，ちょっと付言しておきますと，スタンフォードがバークリーに少しもひけをとらないのは，学生もよくわかっています。スタッフのことを考えると，特にそうですね。で，伺いたいのですが，日本では，大学院でのプログラムを経て，職を得る段階になると高校教師を選ぶということが，実際に，普通にあるわけですね？　そうですか。それはよいことだと思いますね。

司会：わかりません。そうともあまり言えませんが。博士課程に進む学生は，大学職を望んでいてもポストが少ないから，あきらめざるを得ません。この問題に関しては，私自身も難しい立場にあります。研究を続けるように勧めるべきか，あきらめるようにアドバイスすべきか，いつも迷うところです。人は，落ち着くところに落ち着くのだと，私は言うことにしています。

フェラーリ：高校の教師になった場合，そこでそのままという場合が多いのでしょうか。あるいは，その後何年かたって，大学にポストを得るということもあるのですか？　（ありますという声を聞いて）ああ，そうですか。それは幸いです。よかった。チャンスをもう失ってしまった，ということでなければ，よいですよね。……あっ，それも難しい？

司会：実は，高校の先生になることもとても難しいのですよ。

フェラーリ：私が高校の教師と言っているのは，――アメリカではギリシア語よりもラテン語教育のほうが一般的ですので――ラテン語の先生になるということです。日本ではそれはないのですね？

司会：ええ，ありません。

フェラーリ：なるほど，それはないのですね。ただ，文化・思想を教えるということなのですね。

司会：ええ。

Q：大学院の学費のことですが，学生が払うのではなく，大学が払うとおっしゃっていましたね。大学院

生は，通常，学費を払わなくてもよいということでしょうか。

フェラーリ：ええ。

Q：誰でも，そうなのですか？

フェラーリ：我々が奨学金を出しますから，学生は，自分のお金で学費を払わなくてよいのです。学期中，ティーチング・アシスタントの仕事に対しては給与と言う形でですね。いずれにしても，学生は自分のお金で払わなくてもよく，大学側が資金を得て，払うのです。

司会：日本の大学にもティーチング・アシスタントという制度があるのですが，給与は，たいへんたいへん少ない。雀の涙です。

フェラーリ：なるほど，そういうことなのですね。アメリカではですね，ティーチング･アシスタントの給与は，奨学金ぐらい出るのです。と言っても，申し忘れましたが，額としてはけっして多くはなく，通常，年間18,000ドルぐらいで，バークリーでこの額で暮らすのはけっこう厳しいのですよ。バークリーでは生活費が高くつき，たとえばアパートに一人で住むということも，学生は普通できません。経費を切り詰めるために，数人でいっしょに暮らします。でも何とか，やっていくわけです。夏休みには，たいていアルバイトで教えたりします。ですから，奨学金は年間18,000ドルぐらいで，ティーチング･アシスタントの給与も，同じぐらいの額を出すのです。博士プログラムに在籍している間は，大学院生が奨学金か給与かどちらかを得ることができるようにするのです。つまり，6年，あるいは7年間，それ以上は無理ですが，毎年，この額が支給されるというわけです。

司会：それはとても，よいことですね。

フェラーリ：それでは，日本の学生はどうやって生活していくのですか？

司会：（参加者の一人を指差しながら）例えば彼は，

博士課程を終え，PhD を取得しましたが，仕事をまだ見つけることができず，――奥さんと可愛らしいお嬢さんがいます。まさに，高学歴ワーキングプアというわけです。先日も，哲学の教員の公募がありましたが，応募者は100人ぐらいでした。

フェラーリ：大学院生に，奨学金はあるのですか？

司会：政府から 3 年間支給してもらう奨学金を，彼は将来のために貯めていましたし，また，非常勤の講師などします。それで現在，彼はよその大学の非常勤講師をしています。もちろん日本での奨学金は，後で返さなければなりません。

フェラーリ：アメリカでも，専門職の養成機関などに，そういう制度がありますよ。

Q：そうすると，返却するというわけですか，それでは雇用されていない場合も？

フェラーリ：ええ，と言いますか，ほら，ありますでしょう，弁護士や医師の養成機関などですが，学生へのローンがそういったところではありますが，日本との違いは，後で返却する額が相当なものだという点です。でもアメリカで弁護士や医師になれば，ものすごい給料ですから，十分返せます。

フェラーリ：申し上げたいのはですね，つまり，提案したいのですが，こんなふうに思うのです。今日，学生さんとお昼をご一緒したとき，彼が，奨学金の申請のための書類をどのように書くか話してくれているときに思ったことなのですが，彼は毎年，別々の単位認定論文を書くわけですね。互いに関連するものとは言え，何だか，一回一回ギアチェンジしなければならないようで。それが，論文の進行を遅らせる一つの要因かもしれませんね。申し上げたいこと，おわかりでしょう？

司会：はい，まさにそのとおりです。

フェラーリ：アメリカでは，いったん始まれば，ずっとその方向で一つのプロジェクトをそのまま進行させていけばよいのです。どうも，そういうふうには行かないようですね……

司会：結局，彼も先生のお考えとまったく同じです。毎年，大学院生は認定論文を提出しなければなりません。また，雑誌に論文を投稿しますが，学術誌はそれぞれに性格が異なっていて，それらに合うように論文も書くわけです。博士論文の形にまとめるときは，今度はこれらのものを何とかつなげて，新たなまとまりにしなければなりません。学生は課程博士を終えるまでに，三つのことを，三つのやり方で，手がけることになります。

フェラーリ：そして，この制度を変える話は，さしあたりないわけですね。システムが変わる可能性はないのでしょうか……やり方を変えようという話は出たことがないのですか？

Q：これまでには，ありませんね。

Q：改善案を模索していたところです。

Q：まあ，つまり，そのお話ですが，経過については存じません。この問題に関しては，何と言えばよいのでしょうか，ええ。ところで大学院教育の改革の問題ですが。大学院の課程で，中途半端な論文を書くよりも，科目履修を導入し，これを増やした方がよいのかなど，話し合っています。

フェラーリ：アメリカでは，ロンブン，博士論文を提出すると，本として出版するという規定があります。オックスフォード大学出版会 Oxford University Press だとかケンブリッジ大学出版会 Cambridge University Press だとかの出版社から，出されたりします。博士論文でなくてもよいのですが，たいていはロンブン，博士論文が，まず最初の本になるわけですね。ところがここから問題が出てくるのであって……。学術出版を手がける出版社のほうは，こうした博士論文を出版したがらないのです。あまり売れないものですからね。ですから，……システムが完璧にうまくいくということではないのです。日本人研究者は，著書公刊の義務はないのですね？若い研究者は，本を出さなくてもよいのですね？　ああ，在職権に関わる要件はないのですね，つまり……。

司会：課程博士論文が出版される場合もあります。例えば，とても水準の高い出版社を通して出版してもらいますが，ただし，出版社は経済的援助はしません。そうすると，どこから出版費用を捻出すればよいのか，ということになってきます。モノグラフを出そうにも，読む人はきわめてまれであり，それは，出版社にとって危険なことですしね。大きな問題だと思いますね。

フェラーリ：実は，私たちにはプレッシャーがかかっていて，アメリカでは出版しすぎのように思います。イギリスでもそうですが，それは，大学への助成が，学科ごとの出版物の量によって左右されるからです。我々のシステムの抱える問題ですね。出版物の量は，質を落とします。

司会：わかります。私も，何年か前に論文を出していますが，それらを合わせて本にするということがで

きていません。怠慢のせいでもあるのですが，もう少し加筆して完成させたいのです。完成させるには，まだやりたらないことがあります。

フェラーリ：哲学の場合，日本語で書くのですか？

司会：英語で書くほうが日本語で書くよりも評価が高い，ということはありません。

Q：博士論文のためのワークショップについて，もう一度おきかせください。こちらでは，あまりしませんので。

フェラーリ：担当教授の熱意にかかっている部分が大きいのですよ。学生のほうはもちろん完璧ではありません。就職の時期には，集まりもよくなり，スケジュールも立てこんできます。しかし，たいがい，4週間から6週間に1度ぐらいの間隔で行います。

Q：何分ぐらい話すのですか？

フェラーリ：学生が30〜40分話す，といった感じです。

Q：真剣な質問が，たくさん出るわけですか？

フェラーリ：ええ，それはもう。ディスカッションは自由にやりますから――フォーラムなのですよ――，発表よりも常に長くなります。そして質問は，まあ，場合によりますけれどね，job talk の場合，つまり job talk の予行演習の場合には，学術的内容に関する質問というよりはプレゼンテーションの改善のためのアドバイスが中心となります。

Q：大学院生のアドバイザーと個人的アドバイザーとの関係を教えていただけますか？

フェラーリ：大学院生のアドバイザーは，大学院生全体の面倒を見るのです。例えば，学業の面で立ち遅れている者，試験の落第者などがいれば，最終的な責任者として，彼らの状態を把握し，相談に乗ります。もう一つの大役は，大学院の新入生のための入学委員長の務めです。応募書類を見るのも，役目の一つです。

Q：入学者の選抜の責任者だということですか。

フェラーリ：全体では5人で行うのですけれどもね。それが，重要なもう一つの，と言いますか，仕事の重要な一部なのです。それで，個人的アドバイザーのほうですが，私たち教員は皆，複数の学生のアドバイザーとして配属されています。このほうは，もっと日常的な仕事です。担当する学生たちの様子をみるために，1学期に何度か昼食に誘い，どんな科目を履修するつもりか，相談にのるべき問題はないか，などをききます。つまり，全体的アドバイザーと同じことを，また別の先生がするというわけです。ただ，個人的アドバイザーのほうが，もうちょっと別な側面があり，委員会による学年末の学生面談のときに，学生に付き添います。何て言いますか，学生の面倒をみるのですね。

Q：担当の学生は何人ぐらいでしょう？

フェラーリ：それはまったく，決まっていません。と言いますのは，人気のある教員というのがいますし，また，女子学生の場合，おおむね女性教員につくので，どうしても女子学生が集中して女性教員は割り当てが多くなります。バークリーでは男女の比率は，学生では同じになるようにしていますが，教員は女性のほうが少ないですからね。選択科目にもよりますしね。現在，私は，哲学専攻の上級の大学院生2人を担当しています。

Q：そして，3名からなる委員会のほうは？

フェラーリ：面談を行う委員会のことですね？

Q：委員会として，何人の学生が割り当てられるのでしょうか？

フェラーリ：これはですね，学生全員に対して，この委員会が学年末ごとに面談を行います。ただし，論文執筆に入れば，もうこの面談はありません。ですが，しばしば最初の4年のうち，いえ，つまり，あの，委員会は2種類なのですよ。2年目の修士の段階のと，それとは別に，PhD の審査委員会とですね。だから，仕事は別々なのです。私が委員長をしていましたのは…… 5人でした。多くの学生が，すでに論文執筆に入っていますから。ええ，ですので，私が受け持ったのは5人だけでした。

Q：受け入れ人数についてはどうでしょう？

フェラーリ：先ほども，人数が問題だと申しましたね。つまり，学科ごとに，大学院生の人数によって決まった予算が，大学の上部から降りてくるのです。

そして，人気のある学科，つまり，古典学科よりも経済や歴史学科のほうが，大学院生も多い，といったことがあるでしょう。そして，受け入れ学生の人数制限というものもありますから，ただ単にどうだとか言うわけにはいかないのですね，つまり，二つ制限があって，そのうちの一つは，大学院への合格者の定員です。年間15人まで，というようにね。15人というのは，もちろんそんな人数分の奨学金は出せません。そこで，もう一つの制限として，その15人のうちで，また人数制限があるわけです。そもそも4〜6名分しか払えないのにどうして15人もとるのかと言えば，だいたいトップの4〜6名が必ずしも入ってきてくれるとは限らないからです。つまり，応募書類を見て順

序をつけて，欲しい学生としてトップ6名を，つまり90人の応募者がいるとしましょう。90人，100人，あるいは80人，という応募者，その80人，90人の応募者のうちのトップ6名ということですね。彼らがバークリーに実際に来るなら席もお金も提供できますが，なにしろその年の，全国でもトップの学生たちですから，ハーバードにでもスタンフォードにでも行きたがるかもしれない。よその大学に行きたいと思うかもしれないのです。ですから，そういう理由で，15名ぐらい合格させなければならないことになります。たとえば，一番欲しかった学生がよそへ行ってしまうとしましょう。では次の学生ということになりますね。このようにして，余裕を持って15名ぐらい合格させなければならないということになるのです。ですから，トップ15名より，もう少し合格させたければ，それでもよいわけです。ですので，もしも，運悪くトップ10番ぐらいまでの合格者全員に振られたとしたなら，まあ，実際にはそういうことはないのですが，仮にもし，そういうことがあったなら，10番目から15番目の合格者しか入って来ない，ということですね。10番，11番，12番，13番，14番，15番が入ってきて，そして16番は入れないのですよ，大学側に許されてないから。そうでしょう？ちょっとややこしい仕組みですね。15名というのは，予算で決まってくる人数なのです。いずれにせよ，大学側が学科の規模，各学科の大学院生の人数を決め，これ以上はだめですよ，お金を出せませんよと言うわけです。学科によって重要度が異なり，それに伴い，学生組織の強弱がある，といったことが出てくるわけです。ところで先生は学科長になられたことはありますか？

司会：いいえ。

フェラーリ：つまり，学科長というのが予算の面で発言力を持つわけですが，こちらでもそうでしょうか。

司会：研究科長ということですね。こちらのシステムも，似たような状況にあります。ともかく，今のお話ですが，名古屋大学の大学院に出願して受かっても，他の人気大学などに行ってしまう学生がいますから，こうした，他大学にも出願してよそへ行ってしまうかもしれない学生のことを考えて，その分，多めに合格者をとらなければならないというのは，同じですね。

司会：考えるべきこと，たくさん出てきました。本日は，ご一緒させていただき，素晴らしい機会でした。まことに感謝いたします。

フェラーリ：こちらこそ，ありがとうございます。お忙しいなか，どうもありがとうございました。

資料(a)

Greek Literature M.A. Exam (Spring 2007)

I. Briefly discuss the meaning and significance for Greek literature of EIGHT of the following:

iambic trimeter	Archilochos	*chorêgos*
humnos klêtikos	Kleon	Simonides
Nausikaa	*anagnôrisis*	Antiphon
Aristarchos	paratactic style	Atticism
ring composition	incantations	Meleagros

II. Write an analysis of one of the following four passages (see attached sheets). Do not translate or paraphrase, but analyze closely the stylistic and rhetorical features of the passage. Some of the features you may want to discuss are meter, dialect, diction, sentence length, syntactic complexity, word order, figures of speech, and structure of argument or narrative. In your discussion of these stylistic features, you should say *both* how characteristic (or uncharacteristic) they are of this genre and/or author *and* what purposes or functions they serve in this particular passage.

1. Homer *Odyssey* 6. 127-40

2. Euripides *Medea* 1317-43

3. Herodotos *Histories* 1. 5.

4. Lysias 12 (*Against Eratosthenes*) 1-3.

III. Write an essay on one of the following topics (6 options). *Be sure to support your argument with detailed evidence from particular works of Greek literature.*

1. How useful do you find the category of "genre" for distinguishing, explaining and interpreting the Greek poetry that survives from the Archaic period? What kinds of generic labels are the most informative and meaningful: metrical? occasional? functional? (Do these labels correspond to ancient categories? Does this matter?)

2. It has been claimed that the idea of the "barbarian" came into existence for the Greeks only in the 5th C. BCE. What developments do you see in Greek literary representations of non-Greeks and foreigners (however you like to define "foreigners") from the Homeric poems to the time of Euripides and Herodotos.

3. "In spite of the renunciation of the politics of his native city, Plato remained an Athenian at heart. The charis of his dialogues is only imaginable in these surroundings…." Evaluate this statement, not just in terms of the political stance of Plato, but in terms of the literary strategies he uses in his dialogues.

（注：トピック 4 ～ 6 は，ここでは省略）

資料(b)

MA Examination in Greek History
Spring 2007

Write on all three parts (I-III) as indicated. Time: three hours.

I. Identify any EIGHT of the following and discuss their historical significance.

Perioikoi and Helots	Themistokles	*Athenaiōn Politeia*
Archidamian War	Epaminondas	Orphics
Antiochos the Great	Alexandria	Sardis
prytaneis	*dokimasia*	*gumnasion*
ephebeia	Lysias	Syracuse

II. Write an essay evaluating the ancient sources (including material culture, if relevant) for any ONE of the following topics:

(A) Hero cults in the 8th-6th C. BCE .

(B) The legal and social status of women in Athens and/or Sparta during the 5th and 4th Centuries BCE.

(C) The Spartan constitution during the 6th-4th C. BCE.

(D) The "Hellenization" of *EITHER* Egypt *OR* Syria and the Levant during the 3rd-1st C BCE.

III. Write an essay on one of the following topics:

(A) Why did Greek colonization take place in the ways, and on the scale, that it did during the Archaic period? Sketch the geographical distribution of colonies, and discuss the typical relationships that were maintained between colony and founding city.

(B) Can Homer be used as evidence for Greek society during the "Dark Ages" – or any period? Of what historical value are the Homeric epics?

(C) What caused the (First) Peloponnesian War?

(D) Discuss the chief developments in the nature and activities of the Greek polis, and in the character of "political" activity in general, between 400 BCE and the age of Augustus. To what degree would it be true to say that democracy came to an end?

資料(c)

SPRING 2007 Ph.D. GREEK TRANSLATION II

ALL CANDIDATES

TRANSLATE INTO GOOD ENGLISH:

1. THUCYDIDES 1.118

118 Μετὰ ταῦτα δὲ ἤδη γίγνεται οὐ πολλοῖς ἔτεσιν ὕστερον
τὰ προειρημένα, τά τε Κερκυραϊκὰ καὶ τὰ Ποτειδεατικὰ καὶ
2 ὅσα πρόφασιν τοῖδε τοῦ πολέμου κατέστη. ταῦτα δὲ ξύμ-
παντα ὅσα ἔπραξαν οἱ Ἕλληνες πρός τε ἀλλήλους καὶ τὸν
βάρβαρον ἐγένετο ἐν ἔτεσι πεντήκοντα μάλιστα μεταξὺ
τῆς τε Ξέρξου ἀναχωρήσεως καὶ τῆς ἀρχῆς τοῦδε τοῦ
πολέμου· ἐν οἷς οἱ Ἀθηναῖοι τήν τε ἀρχὴν ἐγκρατεστέραν
κατεστήσαντο καὶ αὐτοὶ ἐπὶ μέγα ἐχάρησαν δυνάμεως, οἱ
δὲ Λακεδαιμόνιοι αἰσθόμενοι οὔτε ἐκάλυον εἰ μὴ ἐπὶ βραχύ,
ἡσύχαζόν τε τὸ πλέον τοῦ χρόνου, ὄντες μὲν καὶ πρὸ τοῦ
μὴ ταχεῖς ἰέναι ἐς τοὺς πολέμους, ἢν μὴ ἀναγκάζωνται, τὸ
δέ τι καὶ πολέμοις οἰκείοις ἐξειργόμενοι, πρὶν δὴ ἡ δύναμις
τῶν Ἀθηναίων σαφῶς ἤρετο καὶ τῆς ξυμμαχίας αὐτῶν
ἥπτοντο. τότε δὲ οὐκέτι ἀνασχετὸν ἐποιοῦντο, ἀλλ' ἐπι-
χειρητέα ἐδόκει εἶναι πάσῃ προθυμίᾳ καὶ καθαιρετέα ἡ
ἰσχύς, ἣν δύνωνται, ἀραμένοις τόνδε τὸν πόλεμον. αὐτοῖς
μὲν οὖν τοῖς Λακεδαιμονίοις διέγνωστο λελύσθαι τε τὰς
5 σπονδὰς καὶ τοὺς Ἀθηναίους ἀδικεῖν, πέμψαντες δὲ ἐς
Δελφοὺς ἐπηρώτων τὸν θεὸν εἰ πολεμοῦσιν ἄμεινον ἔσται-
[illegible]

2. DEMOSTHENES Phil. I 7-10

ἂν τοίνυν, ὦ ἄνδρες
Ἀθηναῖοι, καὶ ὑμεῖς ἐπὶ τῆς τοιαύτης ἐθελήσητε γενέσθαι
γνώμης τῶν, ἐπειδήπερ οὐ πρότερον, καὶ ἕκαστος ὑμῶν, οὗ
δεῖ καὶ δύναιτ' ἂν παρασχεῖν αὐτὸν χρήσιμον τῇ πόλει,
πᾶσαν ἀφεὶς τὴν εἰρωνείαν ἕτοιμος πράττειν ὑπάρξῃ, ὁ μὲν
χρήμαν' ἔχων εἰσφέρειν, ὁ δ' ἐν ἡλικίᾳ στρατεύεσθαι,—
συνελόντι δ' ἁπλῶς ἂν ὑμῶν αὐτῶν ἐθελήσητε γενέσθαι,
καὶ παύσησθ' αὐτὸς μὲν οὐδὲν ἕκαστος ποιήσειν ἐλπίζων,
τὸν δὲ πλησίον πάνθ' ὑπὲρ αὐτοῦ πράξειν, καὶ τὰ ὑμέτερ'
αὐτῶν κομιεῖσθ', ἂν θεὸς θέλῃ, καὶ τὰ κατερρᾳθυμημένα
8 πάλιν ἀναλήψεσθε, κἀκεῖνον τιμωρήσεσθε. μὴ γὰρ ὡς θεῷ
νομίζετ' ἐκείνῳ τὰ παρόντα πεπηγέναι πράγματ' ἀθάνατα, ἀλλὰ
καὶ μισεῖ τις ἐκεῖνον καὶ δέδιεν, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, καὶ φθονεῖ,
καὶ τῶν πάνυ νῦν δοκούντων οἰκείως ἔχειν· καὶ ἁπαντ' ὅσα
περ κἀν ἄλλοις τισὶν ἀνθρώποις ἔνι, ταῦτα κἀν τοῖς μετ'
ἐκείνου χρὴ νομίζειν ἐνεῖναι. κατέπτηχε μέντοι πάντα
ταῦτα νῦν, οὐκ ἔχουτ' ἀποστροφὴν διὰ τὴν ὑμετέραν βραδυ-
9 τῆτα καὶ ῥᾳθυμίαν· ἣν ἀποθέσθαι φημὶ δεῖν ἤδη. ἁρᾶτε γάρ,
ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, τὸ πρᾶγμα, οἳ προελήλυθ' ἀσελγείας
ἄνθρωπος, ὃς οὐδ' αἵρεσιν ὑμῖν δίδωσι τοῦ πράττειν ἢ ἄγειν
ἡσυχίαν, ἀλλ' ἀπειλεῖ καὶ λόγους ὑπερηφάνους, ὥς φασι,
λέγει, καὶ οὐχ οἷός ἐστιν ἔχων ἃ κατέστραπται μένειν ἐπὶ
τούτων, [illegible]

資料(d)

SP 07 Ph.D. GREEK II cont.

(3)

ALL CANDIDATES

3. PINDAR P. 11. 1–22

στρ. α' Κάδμου κόραι, Σεμέλα μὲν Ὀλυμπιάδων ἀγυιάτις,
Ἰνὼ δὲ Λευκοθέα
1b ποντίᾳν ὁμοβάλαμε Νηρηΐδων,
ἵνα σὺν Ἡρακλέος ἀριστογόνῳ
ματρὶ παρ Μελίαν χρυσέων ἐς ἄδυτον τριπόδων
5 θησαυρόν, ἂν περίαλλ' ἐτίμασε Λοξίας,
ἀντ. α' Ἰσμήνιον δ' ἀνύμαξεν, ἀλαθέα μαντίων θῶκον, 10
ὦ παῖδες Ἁρμονίας,
1b ἔνθα καὶ νυν ἐπίνομον ἡρωΐδων
στρατὸν ἀμαγερέα καλεῖ συνίμεν,
ἔφρα θέμιν ἱερὰν Πυθῶνά τε καὶ ὀρθοδίκαν
10 γᾶς ἀμφαλὸν κελαδήσετ' ἄκρᾳ σὺν ἐσπέρᾳ
ἐπ. α' ἑπταπύλοισι Θήβαις
χάριν ἀγῶνί τε Κίρρας, 20
ἐν τῷ Θρασυδαῖος ἔμμασεν ἑστίαν
τρίτον ἔτι στέφανον πατρῴαν βαλών,
15 ἐν ἀφνεαῖς ἀροίραισι Πυλάδα
νικῶν ξένου Λάκωνος Ὀρέστα.
στρ. β' τὸν δὴ φονευομένου πατρὸς Ἀρσινόα Κλυταιμήστρας
χειρῶν ὕπο κρατερᾶν
18b ἐκ δόλου τροφὸς ἄνελε δυσπενθέος,
ὁπότε Δαρδανίδα κόραν Πριάμου
20 Κασσάνδραν πολιῷ χαλκῷ σὺν Ἀγαμεμνονίᾳ 30
ψυχᾷ πόρευ' Ἀχέροντος ἀκτὰν παρ' εὔσκιον
ἀντ. β' νηλὴς γυνά.

4. EURIPIDES Hipp. 443–463

Κύπρις γὰρ οὐ φορητός, ἢν πολλὴ ῥυῇ·
ἡ τὸν μὲν εἴκοντ' ἡσυχῇ μετέρχεται,
ὃν δ' ἂν περισσὸν καὶ φρονοῦντ' εὔρῃ μέγα, 445
τοῦτον λαβοῦσα—πῶς δοκεῖς;—καθύβρισεν.
φοιτᾷ δ' ἀν' αἰθέρ', ἔστι δ' ἐν θαλασσίῳ
κλύδωνι Κύπρις, πάντα δ' ἐκ ταύτης ἔφυ·
ἥδ' ἐστὶν ἡ σπείρουσα καὶ διδοῦσ' ἔρον,
οὗ πάντες ἐσμὲν οἱ κατὰ χθὸν' ἔγγονοι. 450
ὅσοι μὲν οὖν γραφάς τε τῶν παλαιτέρων
ἔχουσιν αὐτοί τ' εἰσὶν ἐν μούσαις ἀεί,
ἴσασι μὲν Ζεὺς ὥς ποτ' ἠράσθη γάμων
Σεμέλης, ἴσασι δ' ὡς ἀνήρπασέν ποτε
ἡ καλλιφεγγὴς Κέφαλον ἐς θεοὺς Ἕως 455
ἔρωτος εἵνεκ'· ἀλλ' ὅμως ἐν οὐρανῷ
ναίουσι καὐ φεύγουσιν ἐκποδὼν θεούς,
στέργουσι δ', οἶμαι, ξυμφορᾷ νικώμενοι.
σὺ δ' οὐκ ἀνέξῃ; χρῆν σ' ἐπὶ ῥητοῖς ἄρα
πατέρα φυτεύειν, ἢ 'πὶ δεσπόταις θεοῖς 460
ἄλλοισιν, εἰ μὴ τούσδε γε στέρξεις νόμους.
πόσους δοκεῖς δὴ κἀρτ' ἔχοντας εὖ φρενῶν
νασοῦνθ' ὁρῶντας λέκτρα μὴ δοκεῖν ἐρᾶν;

資料(e)

SP 07 Ph.D. GREEK II cont.

CANDIDATE 5

(3)

5. HOMER Iliad 12. 195–216

Ὄφρ' οἱ τοὺς ἐνάριζον ἀπ' ἔντεα μαρμαίροντα, 195
τόφρ' οἱ Πουλυδάμαντι καὶ Ἕκτορι κοῦροι ἕποντο,
οἱ πλεῖστοι καὶ ἄριστοι ἔσαν, μέμασαν δὲ μάλιστα
τεῖχός τε ῥῆξαι καὶ ἐνιπρῆσαι πυρὶ νῆας,
οἵ ῥ' ἔτι μερμήριζον ἐφεστάοτες παρὰ τάφρῳ,
ὄρνις γὰρ σφιν ἐπῆλθε περησέμεναι μεμαῶσιν, 200
αἰετὸς ὑψιπέτης ἐπ' ἀριστερὰ λαὸν ἐέργων,
φοινήεντα δράκοντα φέρων ἀνόχεσσι πέλωρον
ζωὸν ἔτ' ἀσπαίροντα· καὶ οὔ πω λήθετο χάρμης·
κόψε γὰρ αὐτὸν ἔχοντα κατὰ στῆθος παρὰ δειρὴν
ἰδνωθεὶς ὀπίσω· ὁ δ' ἀπὸ ἕθεν ἧκε χαμάζε 205
ἀλγήσας ὀδύνῃσι, μέσῳ δ' ἐνὶ κάββαλ' ὁμίλῳ,
αὐτὸς δὲ κλάγξας πέτετο πνοιῇς ἀνέμοιο.
Τρῶες δ' ἐρρίγησαν ὅπως ἴδον αἰόλον ὄφιν
κείμενον ἐν μέσσοισι, Διὸς τέρας αἰγιόχοιο.
δὴ τότε Πουλυδάμας θρασὺν Ἕκτορα εἶπε παραστάς· 210
"Ἕκτορ, ἀεὶ μέν πώς μοι ἐπιπλήσσεις ἀγορῇσιν
ἐσθλὰ φραζομένῳ, ἐπεὶ οὐδὲ μὲν οὐδὲ ἔοικε
δῆμον ἐόντα παρὲξ ἀγορευέμεν, οὔτ' ἐνὶ βουλῇ
οὔτε ποτ' ἐν πολέμῳ, σὸν δὲ κράτος αἰὲν ἀέξειν·
νῦν αὖτ' ἐξερέω ὥς μοι δοκεῖ εἶναι ἄριστα. 215
μὴ ἴομεν Δαναοῖσι μαχησόμενοι περὶ πηῶν.

6. PLATO Symp. 175d–176b

Καὶ τὸν Σωκράτη καθίζεσθαι καὶ εἰπεῖν ὅτι Εὖ ἂν ἔχοι,
φάναι, ὦ Ἀγάθων, εἰ τοιοῦτον εἴη ἡ σοφία ὥστ' ἐκ τοῦ πληρε-
5 στέρου εἰς τὸ κενώτερον ῥεῖν ἡμῶν, ἐὰν ἁπτώμεθα ἀλλήλων,
ὥσπερ τὸ ἐν ταῖς κύλιξιν ὕδωρ τὸ διὰ τοῦ ἐρίου ῥέον ἐκ τῆς
πληρεστέρας εἰς τὴν κενωτέραν. εἰ γὰρ οὕτως ἔχει καὶ ἡ
e σοφία, πολλοῦ τιμῶμαι τὴν παρὰ σοὶ κατάκλισιν· οἶμαι γάρ
με παρὰ σοῦ πολλῆς καὶ καλῆς σοφίας πληρωθήσεσθαι. ἡ μὲν
γὰρ ἐμὴ φαύλη τις ἂν εἴη, ἢ καὶ ἀμφισβητήσιμος ὥσπερ ὄναρ
· οὖσα, ἡ δὲ σὴ λαμπρά τε καὶ πολλὴν ἐπίδοσιν ἔχουσα, ἥ γε
5 παρὰ σοῦ νέου ὄντος οὕτω σφόδρα ἐξέλαμψεν καὶ ἐκφανὴς
ἐγένετο πρῴην ἐν μάρτυσι τῶν Ἑλλήνων πλέον ἢ τρισμυρίοις.
Ὑβριστὴς εἶ, ἔφη, ὦ Σώκρατες, ὁ Ἀγάθων. καὶ ταῦτα
μὲν καὶ ὀλίγον ὕστερον διαδικασόμεθα ἐγώ τε καὶ σὺ περὶ
τῆς σοφίας, δικαστῇ χρώμενοι τῷ Διονύσῳ· νῦν δὲ πρὸς τὸ
10 δεῖπνον πρῶτα τρέπου.
176 Μετὰ ταῦτα, ἔφη, κατακλινέντος τοῦ Σωκράτους καὶ
δειπνήσαντος καὶ τῶν ἄλλων, σπονδάς τε σφᾶς ποιήσασθαι,
καὶ ὕμνους τὸν θεὸν καὶ πᾶλλα τὰ νομιζόμενα, τρέπεσθαι
πρὸς τὸν πότον· τὸν οὖν Παυσανίαν ἔφη λόγου τοιούτου
5 τινὸς κατάρχειν. Εἶεν, ἄνδρες, φάναι, τίνα τρόπον ῥᾷστα
πιόμεθα; ἐγὼ μὲν οὖν λέγω ὑμῖν ὅτι τῷ ὄντι πάνυ χαλεπῶς
ἔχω ὑπὸ τοῦ χθὲς πότου καὶ δέομαι ἀναψυχῆς τινος—οἶμαι
δὲ καὶ ὑμῶν τοὺς πολλούς· παρῆστε γὰρ χθές—σκοπεῖσθε
b οὖν τίνι τρόπῳ ἂν ὡς ῥᾷστα πίνοιμεν.

資料(f)

SP 07 PH.D. GREEK II cont.

CANDIDATE 9 (4)

5. SOPHOCLES OT 863-882

Χο. εἴ μοι ξυνείη φέροντι μοῖρα τάν — στρ. α'
εὔσεπτον ἁγνείαν λόγων
ἔργων τε πάντων, ὧν νόμοι πρόκεινται — 865
ὑψίποδες, οὐρανίᾳ ὑ
αἰθέρι τεκνωθέντες, ὧν Ὄλυμπος
πατὴρ μόνος, οὐδέ νιν
θνατὰ φύσις ἀνέρων
ἔτικτεν, οὐδὲ μήποτε λά- — 870
θα κατακοιμάσῃ·
μέγας ἐν τούτοις θεός, οὐδὲ γηράσκει.

ὕβρις φυτεύει τύραννον· ὕβρις, εἰ — ἀντ. α'
πολλῶν ὑπερπλησθῇ μάταν,
ἃ μὴ 'πίκαιρα μηδὲ συμφέροντα, — 875
ἀκρότατα γείς' ἀναβᾶς'
ἀπότομον ὤρουσεν εἰς ἀνάγκαν
ἔνθ' οὐ ποδὶ χρησίμῳ
χρῆται. τὰ καλῶς δ' ἔχον
πάλαι πάλαισμα μήποτε λύ- — 880
σαι θεὸν αἰτοῦμαι.
θεὸν οὐ λήξω ποτὲ προστάταν ἴσχων.

6. HELIODORUS I. 29. 3-6

3 Ἐνταῦθα ὡς καθῆκε τὴν Χαρίκλειαν ὁ Κνήμων καὶ πρὸς τὸ ἔσχατον τοῦ ἄντρου διεβίβασε τῇ πείρᾳ χειραγωγήσας, πολλὰ καὶ ἐπιθαρσύνας καὶ ὡς εἰς ἑσπέραν ἅμα τῷ Θεαγένει φοιτήσειν κατεπαγγειλάμενος (οὐ γὰρ ἐπιτρέψειν αὐτῷ συμπλακῆναι τοῖς πολεμίοις ἀλλὰ διαδράσεσθαι τὴν μάχην), οὐδὲν φθεγξαμένην ἀλλ' ὥσπερ θανάτῳ τῷ κακῷ βεβλημένην καὶ ὥσπερ ψυχῆς τοῦ Θεαγένους ἀφῃρημένην, ἄπνουν καὶ σιγῶσαν ἀπολιπὼν ἀνεδύετο τοῦ σπηλαίου· 4 καὶ τὸν οὐδὸν ἐπαγαγὼν καί τι καὶ ἐπιδακρύσας αὐτόν τε τῆς ἀνάγκης κἀκείνην τῆς τύχης ὅτι μονονουχὶ ζῶσαν εἴη καταθάψας καὶ τὸ φαιδρότατον τῶν ἐν ἀνθρώποις Χαρίκλειαν νυκτὶ καὶ ζόφῳ παραδεδωκώς, ἀπέτρεχεν ὡς τὸν Θύαμιν καὶ καταλαμβάνει ζέοντα πρὸς τὴν μάχην καὶ αὐτόν τε ἅμα τῷ Θεαγένει λαμπρῶς ἐξωπλισμένον καὶ τοὺς ἤδη παρ' αὐτὸν συνειλεγμένους πρὸς τὸ μανικώτερον τῷ λόγῳ παρασκευάζοντα. 5 Στὰς γὰρ εἰς μέσους ἔλεγε « Συστρατιῶται, προτρέπειν μὲν ὑμᾶς οὐκ οἶδ' ὅτι δεῖ διὰ πλειόνων, αὐτούς τε ὑπομνήσεως οὐδὲν δεομένους ἀλλὰ βίον ἀεὶ τὸν πόλεμον ἡγουμένους καὶ ἄλλως τῆς ἀπροσδοκήτου τῶν ἐναντίων ἐφόδου τὰ παρέλκον τῶν λόγων ὑποτεμνομένης· ὧν γὰρ ἐν ἔργοις οἱ πολέμιοι, τούτους μὴ διὰ τῶν ὁμοίων σὺν τάχει τὴν ἄμυναν ἐπάγειν παντάπασίν ἐστι τοῦ προσήκοντος ὑστεροῦντος.

資料(g)

Qualifying Exam Prospectus - Plato Question:

Plato's writing seems to reflect an ambivalent attitude towards *eros*. The tyrant is condemned for his uncontrollable erotic nature in the *Republic*; in the *Phaedrus*, Socrates initially criticizes lovers for being mad. However, Socrates revises his view of madness in his second speech in the *Phaedrus*, praising the lover for being mad; in this dialogue, as in the *Symposium* and *Republic*, the philosopher is described as having an erotic relationship to the forms.

In this question, I will examine Plato's treatment of eros in the *Symposium*, *Republic* and *Phaedrus*. In particular, I will discuss the following topics:
1. What kind of a mental state is *eros*?
2. How does *eros* relate to the philosopher's knowledge?
3. How does *eros* in its philosophical manifestations relate to its sexual manifestations?

Reading list:

1. "Aristophanes' Speech in Plato's Symposium", Dover, Kenneth, in *Journal of Hellenic Studies*, Vol 66, 1966.
2. *Greek Homosexuality*, Dover, Kenneth, Harvard University Press, 1978.
3. *Listening to the Cicadas*, Ferrari, G.R.F., Cambridge University Press, 1987.
4. "Platonic Love", Ferrari, G.R.F., in *The Cambridge Companion to Plato*, Kraut, Richard ed., Cambridge University Press 1992.
5. "Platonic Love", Kossman, L.A., in *Facets of Plato's Philosophy*, Werkmeister, W. ed., *Phronesis* Supplementary volume II, 1976.
6. "Reason and Eros in the Ascent Passage of the Symposium", Moravcsik, J.M.E., in *Essays in Ancient Greek Philosophy*, Anton, John P. and Kustas, G.L. eds., SUNY Press, 1971.
7. *The Fragility of Goodness*, Nussbaum, Martha, Cambridge University Press, 1986.
8. *Symposium*, Plato, Nehamas, Alexander and Woodruff, Paul trans., Hackett Publishing Company, 1989.*
9. *Phaedrus*, Plato, Nehamas, Alexander and Woodruff, Paul trans., Hackett Publishing Company, 1995.*
10. *Republic*, Plato, Griffith, Tom trans., Ferrari, G.R.F. ed., Cambridge University Press, 2000.*
11. *Love and Friendship in Plato and Aristotle*, Price, A.W., Clarendon Press, 1989.
12. "Plato and Freud", Price, A.W., in *The Person and the Human Mind: Issues in Ancient and Modern Philosophy*, Gill, C. ed., Clarendon press, 1990.
13. "Individual as Object of Love", in *Platonic Studies*, Vlastos, Gregory, Princeton University Press, 1981.

* For the Greek, I usually referred to the OCT versions, but ocassionally resorted to the Loeb.

資料(h)

Qualifying Exam Prospectus - Aristotle Question:

In *De Anima* II i, Aristotle defines the soul as the first actuality of a natural organic body having life potentially. He also specifies that the body having life potentially is the body which is actually ensouled. This raises the following problem: how can the body be potentially alive if it is necessarily ensouled? Given that the body which is potentially alive is also that which serves as matter for the living organism, and that the soul is the form of such an organism, this also raises the following difficulty for Aristotle's hylomorphism: how can the body be matter if it is necessarily enformed? In this portion of my exam, I would like to examine the following three questions:

1. What concept of body does Aristotle employ in his hylomorphic analysis of living things?
2. In what sense is the body of a living organism the material constituent of a hylomorphic composite?
3. What is a body potentially having life?

Reading List:

Primary texts:
1. *Metaphysics* Z vii-xi, H vi, Th vi-vii.
2. *De Anima* II i, ii, v.
3. *Generation of Animals* II I, iii.
4. *Parts of Animals* II i, ii.
5. *Meteorology* IV xii.
6. *Physics* I vii, II i.
7. *Generation and Corruption* I iv.

All translations from *The Complete Works of Aristotle : The Revised Oxford Translation*, Barnes, Jonathan ed., Princeton University Press, 1984.
For the Greek, I used whatever was handy- usually Ross.

Secondary texts:
1. "Aristotle's Definitions of *Psuche*", Ackrill, J.L., in *Aristotle: Metaphysics, Epistemology, Natural Philosophy*, Garland Publishing, 1995.
2. "Soul as Efficient Cause in Aristotle's Embryology", Code, Alan, in *Philosophical Topics*, Vol. 15, No. 2, 1987.
3. *Aristotle's Conception of Soul*, Frede, Michael, lecture to the University of California, Berkeley, September 9, 2000.
4. *Aristotle on Substance: The Paradox of Unity*, chs. 5 and 6, Gill, Mary Louise, Princeton University Press, 1994.
5. "Material Necessity and Meteorology IV xii", Gill, Mary Louise, in *Aristotelische Biologie*, Franz Steiner Verlag Stuttgart 1997.
6. "Substance, Being and *Energia*", Kossman, L.A. in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, Annas, Julia ed., Clarendon Press, 1984.
7. "Hylomorphism", Williams, Bernard, in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, Annas, Julia ed., Clarendon Press, 1986.

資料(i)

Qualifying Exam Prospectus- Freud Question:

With the publication of *Three Essays on the Theory of Sexuality*, Freud instituted a revolution in our understanding of sexuality. Though his previous work had already emphasized the importance of sexuality in explaining mental illness, it was in the *Three Essays* that Freud produced an general account of sexual functioning. In particular, he presented a developmental theory of sexuality emphasizing the centrality of infantile sexuality. In the *Three Essays*, Freud also stressed the importance of sexuality to explaining behaviour not ordinarily thought of as sexual- for example, aggression and intellectual curiosity. In his later work, especially in *On Narcissism* and *Beyond the Pleasure Principle*, Freud would develop a libido theory that would render sexual instincts and energy explanatory of the widest range of human functioning and needs. In this section of my exam, I would like to focus on the following questions:

1. Why is sexuality central to Freud's account of the human mind and human functioning? How is Freud's theory of sexuality developmental? Why is infantile sexuality of crucial importance to human development?
2. What roles are played by aim and object in Freud's theory of sexuality? How is sexuality related to pleasure? How do the sexual instincts relater to other instincts, in particular to the death instinct?
3. How does sexuality, narrowly construed, present itself in other contexts through repression and sublimation? How is sexuality explanatory of mental illness? What is normal sexual functioning?

Reading List:

1. *The Neuro-Psychoses of Defence*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. 3, first pub. 1894.
2. *Studies on Hysteria*, Preliminary Communication and Case Histories of Anna O. and Elizabeth von R., Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 2, first pub. 1895.
3. *Further Remarks on the Neuro-Psychoses of Defence*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 3, first pub. 1896.
4. *Three Essays on the Theory of Sexuality*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 7, first pub. 1905.
5. *Five Lectures on Psychoanalysis*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol.11, first pub.1910.
6. *Notes Upon a Case of Obsessional Neurosis*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 10, first pub. 1909.
7. *Formulations on Two Principles of Mental Functioning*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 12, first pub. 1911.
8. *On Narcissism: An Introduction*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 14, first pub. 1914.
9. *Beyond the Pleasure Principle*, Freud, Sigmund, in *Standard Edition*, vol. 18, first pub. 1920.
10. *Freud*, Wollheim, Richard, 2nd ed., Fontana Press, 1991.
11. "Psychology, Materialism, and the Special Case of Sexuality", in *The Mind and its Depths*, Wollheim, Richard, Harvard University Press, 1993.